

要するに、 僕たちは傷つけ合うために 生まれてきたのだろう

売れっ子 Kindle 作家 大矢 慎吾

『僕は嫌な過去を学びに変えた』

怒り

嫉妬

威圧

侮辱

消し去りたいほどに恥ずかしい失敗も、
絶対に忘れないと誓ったあの憎悪の記憶も、
全てと向き合ってきたからこそ今の自分がある。

きっとそこには“成長のタネ”が隠れていたんだ…

まえがき

人の感情を分析してしまうのは小さい頃からの癖だ。

他人の気持ちにうまく共感できなかった僕にとって、起こった出来事を分析するのはもはや日課になってしまっている。ただ日課というのは偉大なもので、どんなにできないことでも、続けているうちに自然とできるようになってくるらしい。逆上がりのできなかった子供や、1メートルも泳げなかった子供が、失敗を繰り返しているうちにいつの間にかできるようになっているのと同じだ。

そしてできないことができるようになった途端、苦手意識は好奇心に変わっていくのだから不思議なもの。「できた!」というあのブレイクスルーの快感が忘れられず、さらに深掘りしているうちにいつの間にかのめり込んでいる。そしてついには自分から「特技」なんて言い出すのだから始末が悪い。

この書籍は、まさにそんな著者の”思い込み”から執筆されたものだ。

自分でもこの表紙を前にすると、「随分と大風呂敷を広げたものだな…」などと思ってしまう。まるでこの世の真理を知り尽くした賢人みたいなこの言い回し…

ところが本人にそんなつもりはまったくない。これは単に、僕なりに築き上げた人生観を述べているに過ぎない。嫌な出来事と向き合うことで感じる思いは人それぞれだと思う。「僕たちが傷つけ合うために生まれてきた」これはあくまで主観によるものだ。

要するにこの書籍は、少し歌唱力に覚えのある者が動画サイトに投稿する「歌ってみた」という動画よろしく、無名の作家が自身の学びを「書いてみた」という書籍なのだと理解して読み進めてもらえればと思う。

ここに書いてあるのは、僕が体験した過去の嫌な出来事と、それと向き合ったことで感じた『気づき』だけだ。

ジャンル分けするならば「エッセイ本」ということになるだろう。当然ここにはドラマティックなストーリー展開も用意していなければ、輝かしい逆転人生を誇らしく見せつける主人公も登場しない。平凡な一般人が、35年の人生の中で体験したありきたりなエピソードしか書かれていない。

ただ、だからこそ、あなたの過去の体験につながるものがあるのではないかと思っている。

この書籍があなたにとってどんな意味をもつのかは僕にはわからない。読み終わった後で「時間のムダだった」と感じる人もいるかもしれない。「何が言いたいの？」という辛辣な意見をいただくことも覚悟している。

ただ一つだけ確かなのは、**『嫌な過去ときっちり向き合ってきたからこそ今の自分がある』**ということだ。

あなたが過去と向き合う際の参考になればと思い、あえてなんの誇張も脚色も加えず、著者が体験した出来事をありのまま書き記した。これまでずっと実名で活動してきて、既に自分の過去のことは散々書いているけど、それでも自分の人生を人様にさらすのはけっこう勇気がいる。もう慣れてしまって、半分ランナーズハイのような状態になってはいるが、やはり冷静に考えると少し憂鬱になってしまう時もある。

ただそこまでしなければ、無名作家の自費出版した書籍など何の価値も生み出さないだろうと思う。だから身を削る思いでこの書籍に書き記した次第だ。

少しでもあなたの役に立てば嬉しい。

目次

まえがき

『怒り』について・・・

妻のトラウマ
恋人は他人
所詮、父の人生
他人は変えられない
弱者に人は救えない
お節介は人を苦しめる
怒りを伝えないと損をする

『嫉妬』について・・・

アイドルになった元カノ
諦めた少年野球
欲望に素直な後輩
師匠は都度入れ替える
友達は切ればいい
束縛の正体
僕には才能がある
ずっと作家

『威圧』について・・・

最初の反面教師
お前には無理だ
あなたの為を思って…
マルチ商法と友達
母からの最後通告
成功への後押し

『侮辱』について・・

存在価値の確認
お漏らし慎吾
八方美人の手口
誰もがコバンザメ
男を見下す女性客
嫌味の理由
皮肉屋の父
憎悪に支配される

あとがき

『怒り』について・・

妻のトラウマ

結婚してみてわかったのが、女性にもズボラな部分があるということだ。

仕事が忙しい時期はソファでうたた寝してそのまま朝を迎えることもあるし、脱いだ服をあちこちに放置しっぱなしのこともある。洗い物をして排水溝を洗わなかったり、掃除機をかける周期が一ヶ月以上空いていたりする。

結婚に対してロマンティックなイメージばかりを抱いていた僕は、いかに自分が理想を追い求めすぎていたのかを思い知った。

僕はそこまで神経質でキレイ好きではないと思うが、一人暮らしが長いと誰でも家事がそこそこできてしまう。母に部屋を掃除してもらっていたような人物でも、洗濯物を干す時に”パンパン”と自然とはたきよくなるものだ。自分がやらないと生活は不衛生になる一方だから。

一人暮らしを経験したことのない妻が家事が得意でないのは仕方がないとは思った。ただ、「やってもらっている」という感謝の気持ちは感じつつも、「これはもう我慢ならない」となればさすがに口を出さないと仕方がない。だけど口に出した時はもれなく口論に発展するのだった。

そうやってぶつかり合いながらも、お互いに譲り合ったり、相手の考えを尊重することで、なんとか夫婦生活をこなしてきた。

ただ『歯医者に行かない』という妻の考えだけは、どうにも納得することができなかった。

妻はとにかく歯医者に行きたがらなかった。「歯が痛い…」と何ヶ月も前から言い続けているにも関わらず、頑^{かたく}なに治療を始めようとしなかった。妻は元々偏頭痛^{へんずつう}もちなので、歯痛は時に強烈な頭痛に発展するらしい。症状があまりにも酷い時には仕事を休むほどだった。

家事は妻のフィールドだけど、健康は二人の問題だ。だから僕は妻に対して当然の疑問をぶつけた。

「どうして歯医者に行かないの？」

すると妻は言った。

「怖いから」

僕はその言葉の意味を^{はか}図りかねた。

「…怖いって、何が？」

三十路を過ぎた大の大人が、怖いから歯医者に行きたくないだなんて、何をバカなことを言ってるんだ。

「全部が怖い」

けれど妻は僕の問いかけに対して、このような曖昧な返答を繰り返すばかりだった。

当時はまだ引っ越したばかりの頃だったので、“腕の悪い歯医者に当たってしまうのが怖い”という意味なのかとも思った。でも最近はインターネットで事前に歯医者の特徴を調べられるし、利用者の口コミからなんとなくその治療院の雰囲気も知ることができる。自分に合いそうな歯医者をついじゅくりと選べばいいだけの話だ。

「歯を削られるのが怖い」というのはなんとなくわかる。痛いし、あの”キューーン”というドリルの音は聞いているだけで不快になる。だから最初、妻が怖いのは、「痛いのが怖い」ということなのだろうとたかをくくっていた。

最近の歯医者には様々な特徴があって、小児歯科に特化した歯医者もあれば、治療部屋が個室となっている”完全個室”の歯医者もある。また保険内診療だけでなく、保険が適用されない自由診療との混合診療を行う歯医者も多い。この自由診療には、歯列矯正も兼ねたインプラント治療の他にも、歯を削らない「ドッグベストセメント」という治療薬を使った虫歯の治療法なども存在する。ただやはり何十万とかかる自由診療を一般人が選択するのは難しい。

僕の目にとまったのは「無痛治療」だった。

昔と違い、最近の歯医者では患者側にも選択をさせてくれるらしい。通常は麻酔を使わない軽度な治療の場合でも、「麻酔を使いますか？」とわざわざ事前に聞いてくれるのだそうだ。まるでサービス業である。それがいかなる治療にも麻酔を使ってくれる無痛治療だ。

妻の恐怖が痛みに対するものだったら、この無痛治療をしてもらえる歯医者を選択すればいい。そう考えた僕は、無痛治療をうたった歯医者をいくつかピックアップしてから、再び妻に進言した。

「最近の歯医者はどうな治療にも麻酔を使ってくれるらしいよ」

それに対して妻は言った。

「そんなことは知ってる」

…だったらどうして行かないの？　という言葉以外出てこなかった。しかしそれを言うと、例によってまた口論に発展することはわかっていた。

それから、何度かやんわりと妻に歯医者に行くよう進言してみたものの、妻は一向に治療を始めようとはしなかった。それどころか会話が虫歯治療に向かっているのを察知すると、妻は途端に機嫌を損ねるようになった。当然、虫歯はどんどん酷くなる一方だった。

ある日、とうとう僕の我慢は限界に達した。

「このまま放置してたらもっと酷くなるだけだよ。虫歯は放っておいても治らないんだから」

「・・・」

「何がそんなに怖いのか？」

「全部」

「全部って、どういう意味？」

「・・・」

「どうせ、いつかは行かないといけない状況になる。だったら治療するのは早い方がいいでしょ？　このまま問題を先送りにしていても仕方がないじゃないか」

「でも放っておいたら治るかも」

「いやいや、以前よりもどんどん酷くなってるって」

「・・・」

「このままだと、マジで将来、入れ歯になるよ」

「・・・」

「そんなお前を見たくない…」

「でも怖いよ！！！」

そう言うと妻は、そのまま部屋を出て行ってしまった。

僕には妻の恐怖がどうしても理解できなかった。

「歯医者が怖い」なんて、どう考えても子供がするような言い訳にしか思えなかった。怖かろうが何だろうが、行かなければどうしようもないことはわかりきっている。放っておいたせいで入れ歯になってしまう方がよっぽど怖いではないか。だから妻が歯医者に行かないのは、ズボラな”先延ばし癖”のせいだとは思えなかった。

…ただ、あそこまで抵抗されるのも何か妙だ。

そこである日、インターネットで「歯医者 怖い」というキーワードで検索をかけてみた。すると検索結果には、歯医者に行かないパートナーについて議論を交わした掲示板サイトがたくさん出てきた。そのうちの一つを見てみたところ、僕と同じような愚痴や怒りが無数に投稿されていた。

「歯医者が怖いと言って行かない夫がマジでムカつく」

「四十過ぎにもなって歯医者が怖いだなんて、子供みたい」

「怖いから行きたくないなんて意味不明」

僕はその一つ一つの投稿を「そうそう、そうだよ」と頷きながら見ていた。その投稿にも、僕と同じように賛同意見がズラリと並んでいた。同じ疑問を持った人が世の中にはたくさんいたのだ。

それに対して、反論する意見も寄せられていた。

「怖いんですよ」

「行けないんですよ」

見れば妻と同じようなことを言っている。その反論を見ると「まったく、ズボラな奴らだな」とまた怒りがこみ上げてきた。

「不潔だから近寄らないでほしい」

掲示板内での議論が白熱したのか、このような辛辣な意見も投稿されていた。

「子供に虫歯がうつりそうで本当に困っている」

僕のように、多くの人がパートナーに説得を試みたものの、失敗に終わっている様子だった。

そうして掲示板に寄せられた投稿を読んでいると、一つの長文が目に入った。

『小さい頃に歯医者で怒られて以来、歯医者に行くのが怖くなってしまいました。痛いって言うてるのにやめてくれないし、”口の中が汚いね”と蔑まれたりして…。口の中を異性に見られるだけで嫌なんです。自分がズボラだってことは自分が一番よくわかってるんです。汚いだと

か不潔だとか、デリカシーが無いにもほどがあります。子供みたいなことを言っているのかもしれませんが、だけど、本当に怖いんですよ。考えただけで胸が苦しくなってしまうんです。自分からわざわざ怒られに行っているようで、もう二度と、歯医者には行きたくないです」

その長文を目にした時、僕は初めて、怖いから歯医者に行かないと言っていた妻の「本当の恐怖」を知れた気がした。

最初は単に痛いのが怖いのだろう程度に思っていたけど、どうやら実際はそんなに単純なことではないようだ。本人に治療したい意思はある。けれど、いざ歯医者に行くことを想像すると、過去の恐ろしい記憶がフラッシュバックしてしまうらしいのだ。

しかもなぜだか、その自分が感じている気持ちを、自分でも上手く説明することができないらしい…

頭ではわかっているけど体が自然と拒否反応を示してしまう。詳しいことはわからないが、要するにトラウマとはそういうものなのだそう。

自分の価値観の範囲で相手と接していると、相手が抱えている本当の苦しみに気が付けない。すると相手は余計に苦しむことになるし、自分自身もいつまでも苛立ちが消えない。理屈では説明できない、自分でもよくわからない、そういう恐怖だって存在するらしい。

たとえば相手の言い分が理解できなくても、問い詰めた相手がまごついていても、すぐに「逃げている」と決めつけてはいけない…

この時、僕は思い知った。

恋人は他人

20代前半の頃に付き合っている彼女がいた。

彼女と出会ったのは不動産屋だった。彼女が一人暮らしの部屋を探しにきた客、そして僕が部屋を紹介する店員という立場だった。

最初に彼女と出会った時、笑顔が可愛らしく、愛嬌があって、明るいタイプの女の子だという印象を受けた。また部屋の契約書について連絡を交わした時にも、彼女の対応はとてもきめ細かくミス一つなくスムーズに終わることができたため、「しっかり者」というイメージもあった。

その印象は、付き合ってもしばらくは変わることがなかった。

彼女は昼間にOLとして事務職に従事し、夜は居酒屋店員としてアルバイトをこなすダブルワークを行っていた。日々そんな忙しい状態でありながらも、仕事終わりに会った時にはいつも手料理を振舞ってくれていた。出てくる料理もとても家庭的で、普段野菜を食べる機会のなかった僕がバランスよく栄養を摂取できる献立になっていた。

彼女は出会った時の印象そのままに、何でもそつなくこなせるタイプの子だった。そう、まさに学級委員のような感じだった。

…しかしそれは、彼女が自分の抱えている問題に対して決して負けまいと抵抗する心の強さの表れだったのかもしれない。彼女のことを知れば知るほど、僕は自然と彼女が抱えていた問題も知ることになった。

”男性恐怖症”

世の中には一方的に女性と関係をもつことを楽しんでいる集団がいるらしい。そういう連中は黒塗りのワゴン車に乗っていて、人通りの少ない夜道などを徘徊している。彼女は学生時代にそいつらの餌食となったことで、心の中に男性を毛嫌いする気持ちを抱えていた。その思いは突然に発動するらしく、同じ布団で寝ていると、夜中に突然”バンッ”と突き飛ばされることがあった。

僕自身も彼女のそういう部分を前兆的にわかっていたのかもしれない。彼女からその告白を受けた時はあまり驚かなかった。それよりもより一層、彼女のことを守らなければいけないと決意を固めた。

”母親の借金”

彼女の母親もまた情の深い人だった。初めて会った時にそんな印象を感じた。

親戚から「お金を貸して欲しい」と頼まれると、どうしても断る事ができなかったらしい。しかも手持ちが無い時には、消費者金融から借りてまでお金を渡していたそうだ。事実上、相手の借金を肩代わりしていたのだ。

昔ホストをやっていた彼女の父親は、酒に酔うと手がつけれなくなる人だった。

僕と付き合った頃には既に彼女の両親は離婚していて、父親だけが実家から少し離れた場所で一人暮らしをしていた。過去に実害が生じたためにそうせざるを得なくなったらしい。酒に酔った状態で口論となった彼女の弟を血まみれになるまで殴りつけたそうだ。すぐ側で見ていた彼女が、「弟が父親に殺される」と感じたほどの修羅場だったらしい。

このような家庭環境だったので、彼女の母親は女手一つで四人の子供を育てあげた。生活費を賄うために多額の借金を抱えながら…。

彼女が高校に上がる頃には、その借金の額は莫大になっていて、もはや母親一人の力で返すには限界だった。そこで彼女は、早くから自分で稼いだアルバイト代を家に入れていたのだった。その延長線上で、高校を卒業した彼女は昼と夜のダブルワークを毎日こなし、母親と二人三脚で借金を返していた。

僕が知り合ったのは、そんな怒涛の日々を五年以上も続けた頃の彼女だった。

ある日、僕は彼女に尋ねた。

「どうして他の兄弟はそこまでやってないのに、○○○だけがこんなに働いてるの？」

彼女は別に長女でもない。だから僕は、彼女だけが苦労を強いられている状況を不思議に思っていたのだ。だけどその質問に対して、彼女は被害者面をすることもなく答えた。

「それぞれの考えがあるからね」

「姉ちゃんや弟は、同じように働かないの？」

「・・・」

「この状況になるまでお父さんは何をしてたの？ たまにこの部屋にも来てるみたいだけど、別にお金を渡しにくるわけでもないしさ」

「・・・」

「そもそもお母さんが渡してるお金は、消費者金融から借りたものだってことを親戚の人は知ってるの？」

「…知らない」

「何で？ そんなのおかしいよ」

「…お父さんも知らないよ」

「はあ？ なんだよそれ…父親も兄弟も親戚も、オレはちょっと許せないな。このままじゃダメだ。オレがみんなにガツンと…」

「他人のくせにわかったようなことを言うな！」

「えっ…」

「ウチの家族の何を知ってるのよ！？ これまでに私たちがどんな困難を乗り越えてきたのか、あなたは知ってるの？」

「いや…」

「ウチの家の問題に他人が首を突っ込むな！」

あの瞬間、自分が取り返しのつかないことを言ったのだと気付いた。

僕は彼女を守りたい一心だった。しっかり者に見えても彼女はとても弱い女性だった。だから彼女に解決できない問題が降りかかっていたのなら、絶対に僕がどうにかしなければいけないと思い込んでいた。その

行き過ぎた正義感が、彼女の身内に対する「許せない」という思いに繋がってしまったのだった。

だけどころ彼氏であっても所詮は他人。何十年とかけて築いた身内の強い絆の前では、彼氏の存在などお呼びでないのだ。

どれだけ相手を助けたいと思っても、他人同士には越えてはいけない一線が存在する…そのことを身をもって思い知った。

所詮、父の人生

数年前から父が病気を患っている。

父の病気は、日本でも数例しか報告されていない”難病指定のされていない難病”だ。これが国の指定難病だった場合は医療費について助成金が出る。この負担の差による家計への影響は、病気の期間が長くなればなるほど大きくなっていく。

厄介なのが、父の病気は決まった症状がでるわけではないことだ。体の免疫機能に異常をきたすことで、免疫が体内に侵入した悪い菌を駆除するだけでなく、本来の健康な細胞にまで攻撃をくわえてしまうらしい。そこで免疫の機能そのものを抑制する薬を服用して体の抵抗力を抑えてしまう。その結果、父はあらゆる病気にかかりやすい状態になってしまうのだ。この病気のため父は定年を迎える前に退職を余儀なくされた。

父が病気になった原因はわからない。根詰めて働き過ぎていたのかもしれないし、体質的に元々そういうリスクを抱えていたのかもしれない。

い。色んな理由が考えられるが、ただ一つ、病気になるまでの父の食生活は”あまり良くなかった”。

僕は子供の頃から父が野菜を食べているところをほとんど見たことがない。ジャンクフードが好物で、ことあるごとに即席麺だけで食事を済ませていた。基本的に味の濃い物しか摂らないので、ウチの食卓にはいつもソーセージや揚げ物といった加工食品ばかりが並んでいた。

しかも聞くと父はそんな食生活を十代の頃から送ってきていたらしい…これは”あまり良くない”というには甘すぎる。ハッキリ言って、父の送ってきた食生活は酷かった。父には悪いが、「そりゃあ、いつかこういうことにもなるだろう…」という思いを感じていたというのが、病気を知った時の僕の本心だった。

他人からの忠告を一切聞き入れなかったあの父も、病気になってからは、さすがに医者意見に耳を貸すようになった。

まず一日最低一箱は吸っていたタバコをやめた。僕は父よりも早くからタバコをやめていたのだが、父がやめたと聞いた時にはもの凄く驚いた。それまでの父の様子を見ていたら、「この人は一生タバコを吸い続けるのだろうな…」と、説得を半ば諦めていたくらいだったからだ。

そして肝心の食生活も変化した。

あれほど野菜嫌いだった父が毎日積極的に野菜を摂るようになった。そして大好きだったジャンクフードは一切食べなくなり、日常的に飲んでいたコーラも控えるようになった。それまでの父の様子を知っていた家族からすれば、本当に信じ難いほどの変化だったのだ。その変化に一番喜んでいたのは母だった。看護師である母が、どれほど父に助言を無視されていたのかは容易に想像がつく。

ただ、これほど食生活が変化したのに、自炊することまではしなかった。相変わらずスーパーに並んだお惣菜などの”出来合いの物”ばかり食べていたのだ。もちろんジャンクフードに比べたらマシなのだろうが、調理してから時間の経っている食品が体に良いとは思えない。

そもそも父は元料理人なのだ。そんな物を食べずとも、栄養の整ったバランスの良い献立を考え、毎日自分で調理した新鮮な食事を摂る方が良いに決まっている。しかもその方が家計にとっても安上がりなのだ。そんなことは仕事を辞めた父には簡単にできることだった。

「自分で食事を作った方がいいと思う。出来合いの食べ物に栄養なんてあんまり無いと思うし、それに食費が高くなるんじゃないの？」

僕は何度か父に進言した。ところが何度言っても、父の返答はいつも同じだった。

「祖母と同居している今の状況で、オレが飯を作ると色々と面倒なことが生じる。まあ、同居してると色々あるんだよ」

…色々って、何だよ？

父に代わって働いてる母に対しても、何度も言った。

「どうして体がここまで悪くなっているのに、親父は自分で料理を作ろうとしないの？ 男のプライドで家事をしたくないって話？」

それに対する母の返答もいつも同じだった。

「私も本当は、自分で料理を作ってほしいと思ってるのよ。その方が絶対に健康にも良いし、お金もかからないしね。だけどさ…同居してる

と色々あるのよ。だからお父さんが料理を作りたくないという気持ちもわかる」

…いや、だから色々ってなんだよ？

僕には両親の言い分がまったく理解できなかった。

しびれを切らした僕は、ある日実家に帰省したタイミングで、面と向かって両親に真剣な思いを伝えた。

「色々あるのかもしれない。オレにはその事情はまったくわからないし、正直言ってわかりたくもない。だって、それは命よりも優先しなきゃいけない話なの？ **どんな事情があるにしても命よりも大事なものをなんてこの世に無いだろ？**」

目に涙を浮かべて訴えた僕の話に対して、二人はしばらく、うな垂れたまま黙っていた。

…が、しかし、そこまでしても、父は料理を作るようにはならなかった。そしてまた母も、その状況をいつしか受け入れてしまったのだった。

”どうして二人とも変わってくれないんだ！”

僕は悔しくて悔しくて、やり場のない怒りを感じた。

ただしばらく経ってから僕はこう思うようになった。

「所詮は父の人生か…」

僕がどれだけ父を思いやったところで、父の人生は僕の人生ではない。

たとえどれほど正論を言ったところで、どうするのか、そしてどう生きるのかを決められるのは父本人だけなのだ。

いくら人の人生に口を出しても、相手を変えることはできない。

そう、たとえ血の繋がった親子であったとしても…

他人は変えられない

世の中には学歴も経験も不問の仕事がある。例えば肉体労働や、毎月決まったノルマを課せられる成果主義の仕事などがそうだ。与えられる仕事に高度な専門知識は要求されないものの、求められる基準は決して低くはない。「根性」や「気合い」といった精神論が試されるキツイ仕事がほとんどだ。

そういう仕事は大抵人の入れ替わりが激しい。そしてまたそのような仕事に従事している人間にはヒネクレた者が多い。僕が二十代前半の頃に働いていた不動産屋がまさにそうだった。その賃貸物件の仲介をする不動産屋で、僕は四年間営業マンをやっていた。

歩合給で働く営業マンにはどこか職人気質なところがある。誰もが自分の仕事にこだわりをもっていて、仕事のやり方が個々の営業マンによって異なる。業務の内容自体も個人プレーの要素が強いため、各々が自分のペースで仕事をこなしている。そのため、基本的には一人一人が自分の売上にしか興味がない。

僕のいた不動産屋は、スタッフ全員が自分の売上に関係する仕事しかやりたがらなかった。まるでそれ以外の仕事は時間の浪費だと言わんばかりに、上司に頼まれた時にも、嫌な顔をするスタッフが多かった。

なかでも敬遠されていたのが『新人教育』だ。

新人を育てたところで自分に売上は入ってこない。むしろ、新人が一人前になればライバルが一人増えるうえ、自分にまわってくるはずの客を奪われることになる。自分がひと月に担当する客の母数が減ってしまうからだ。ある意味で新人を育てることは、自分の食いぶちを減らす相手を自ら育てるようなものだった。

また「営業」という仕事は人に教えるのが難しい。やり方が一人一人違ううえに、営業のスタイルもその人によって異なる。営業のスタイルとはその人物の個性であって、誰かに教えられるようなものでもない。経験を積んで自分で作っていくしかないのだ。

だから苦労して新人に教えたとしても、まだ身になる前に辞めてしまうことが非常に多い。どうしても最初の結果を手にするまでに時間がかかってしまうため、そうなるまでに自信を失って挫折してしまうか、もしくは辛抱堪らず諦めてしまうのだ。

ただ、そもそも新人を指導することについては僕も少し抵抗を感じていた。

「オレは誰かに教えてもらったことなんてないぞ？ それなのに、どうして新人にはそこまで丁寧に教えてやらなきゃいけないんだ？」

その職場には仕事のマニュアルすらも存在していなかった。そのため誰もが先輩の仕事を目で見て盗んで覚えた。自分はそうやって一人前になったのに、どうしてわざわざこちらから教えなければならないの

だ？ 全員がそう思うってしまうのも無理はない。だから新人教育が敬遠されていたのも仕方がなかったことなのかもしれない。

だけど入社して三年ほど経った頃、ふと、こんなことを思った。

「後輩が一人しか育っていない…」

その三年間で何十人という社員が入社しては辞めていった。三ヶ月で辞めた社員もいれば、わずか一週間足らずで辞めてしまった社員もいた。中には入社したその日に昼休憩に出たまま戻ってこない者までいた。

最初は人の入れ替わりが激しいのは仕方がないことだと思っていた。だけど三年間で人が一人しか育たないのはどう考えてもおかしい。他の系列店には、自分の同期の他にもよく知った後輩たちがたくさんいた。もちろん辞めた者も多かったけど、それ以上に新たに入社した者たちが順調に成長を遂げていたのだ。

「この店の状態は少し異常なのかもしれない…」

それまで新人教育に関心のなかった僕も、自分に役職が付与されたこともあり、店全体の運営のことも考えるようになった。そうするうちに自然と人材育成にも目が向くようになったのだ。新人の育たない店が今後もうずっとうまくやっていけるはずがない。

そして僕は新人が入社する度に、自分から教育係を買って出るようになった。

しばらくすると店の問題点がわかってきた。

スタッフ全員に、新人の成長についてもはや”諦めムード”が漂っていたのだ。

それまでも自分から新人に何かを指導するスタッフはいなかった。けれども、相手から質問されたことに関しては、意外にも全員が積極的に指導する一面を見せていたのだ。それはきっと職人氣質なところからきているのだと思う。どの営業マンも、自分のこだわりを誰かに披露したいと思っているのだ。新人に質問された時、思わず話に熱がこもってしまう営業マンの気持ちは僕にも凄くよくわかった。

けれどそうやって伝えた熱い思いは一切実を結ばなかった。結局、新人はみんな去って行ってしまったのだ。そんなことが三年も続けば、誰もが「次の新人もどうせ辞めるだろう…」と考えてしまうのも無理はない。熱くなった自分がバカみたいに思えるからだ。

この諦めムードが最悪なのは、教えられる側にも伝達してしまうところだ。

「どうせ辞めるだろう…」という気持ちで相手に指導をしていると、その気持ちは不思議と相手にも伝わってしまう。指導を受けた側も「どうせ自分には無理だろう…」と受け取ってしまう。すると最初はどれだけやる気のあった新人でも、気持ちがどんどん萎えていってしまい、最終的には「どうせ頑張っても無理だな…」となって辞めてしまうのだ。

そのことに気が付いた僕は、この諦めムードを打ち破ろうと孤軍奮闘した。

まずは営業のマニュアルを作った。営業の仕事は経験則の部分は大きいけれど、基本的に話す内容は決まっている。内容に個人差があるとはいえ、”これだけは話すべき”という要素を抜き出すことはできる。僕はその最低限の要素だけをまとめたトークの「台本」を作成した。

台本さえあればどんな新人でも営業トークが喋れるようになる。どれだけ話すのが苦手な新人でも、台本に書いているセリフを全部暗記してしまえばいい。お客さんとの会話がその通りに進むことはまずないけれど、基本のパターンを習得していれば、そのうち応用が利くようになるはずと思った。

また新人に指導する時には、できるだけホワイトボードを使った。

不思議なものでホワイトボードに書いて指導をすると、相手も「学んでいる」という意識になるらしい。学校の授業と似ているからだろう。何度か教えているうちに、ただ口で伝えるより書いて伝えた方が相手の身になりやすいことに気付いた。また教える側も上手く説明しないと相手に伝わらないため、その内容をより深く理解しようとする。そうなれば自然と教える側の指導力も向上していくはずだと思った。

そうして試行錯誤を繰り返すうちに、どうにか「指導マニュアル」らしきものが出来つつあった。

けれど残念ながら、新人は一向に育たなかった。

理由はあきらかだった。僕一人がどれだけ息巻いて新人を指導したところで、周りのスタッフに新人を歓迎する気持ちがなければ意味がないのだ。

例えば、僕がホワイトボードを使って熱心に指導をしている時でも、周りにいるスタッフの一言でムードは一変する。「そんなことを教えても意味ないんじゃない？」そのたった一言が、新人のヤル気を削いでしまうのだ。

それは日常のあらゆる場面で新人の向上心の妨げになった。せっかく不動産屋の営業マンに対して希望をもって入社した社員たちも、人間関係にここまで嫌な思いをするのなら、こんな仕事はしたくないと見切りをつけてしまう。

要するにうちの店は、新人に「この店では働きたくない」と思わせるような職場環境だったのだ。そういう根本的な部分に問題があるうちは、どれだけ社員教育を改善させても、社員を職場に定着させるのは無理だったのだ。

僕は店長に進言した。

「このままでは大変なことになりますよ」

だけど店長は、僕の話にまったく耳を貸してくれなかった。僕がどれほど新人教育の重要性を説いても、「お前に店の運営の何がわかる？」などと軽くあしらわれて終わりだった。それは僕が二十四歳で、店長が三十八歳だったことも少なからず影響していたように思う。

「新人が育たなくて一番困るのは店長自身のはずなのに、どうしてわかってくれないんだよ…」

それから何度店長に進言しても、店長の考えが変わることはなかった。そしてまた、周りのスタッフの新人に対する冷ややかな態度も変化することはなかった。僕がその都度指摘をしても「何を一人で必死になってるの？」と小バカにされるだけだった。

「どうして誰もわかってくれないんだ…」

そんな状況が続いたある日、毎月恒例だった店の食事会で、一人の先輩が酔った勢いで僕にこんなことを言った。

「お前の指導は下手だよな」

僕はその瞬間、手にしていたビールジョッキをテーブルに叩きつけた。

「何もしていないあんたに、なんでそんなことを言われなきゃいけないんすか！？」

「・・・」

「この店には誰一人として新人のことを考えている人はいません」

「・・・」

「ここまで人が育たない職場なんてどう考えてもおかしいですよ？自分さえ良ければそれでいいんですか？ 新人教育に興味がないのは別にいいですよ。だけど、新人のヤル気を削ぐような発言をしたり、暗に辞めさせるような方向にもっていきのだけはやめて下さい。僕は真剣に新人を育てようと考えています。そこに横槍を入れるようなマネだけはしないで下さい」

もっと汚い言葉だったが、僕は本気で自分の思いを伝えた。少しでも全員に新人教育のことを考えてほしい、少しでも店長に自分の主張を聞き入れてほしい、そういう気持ちで僕は話をしたつもりだった。

だが翌日、出勤した僕に対してみんなはこう言った。

「酒の勢いで生意気なことを言いやがって」

周りのスタッフの新人に対する態度も、店長の考え方にも、変化は一切起きなかったのだった。

それから不動産屋を退社してから数年後、風の噂で店の運営が崩壊状態になったことを聞いた。長く働いていたスタッフが店長の考えに反発し、大半のスタッフが一斉に店から離反してしまったのだそうだ。そのタイミングで若いスタッフが育っていなかったため、店の売上が一気に落ちてしまったらしい。

あの時の僕の言い方、そしてタイミングはたしかに悪かったとは思う。酒の席ではなく、ちゃんとした場で面と向かって主張を伝えるべきだった。そういう反省点はたしかにある。

…だけどその噂を耳にした時、僕は『他人は変えられない』ということを知った。

[続きを読むにはこちら](#)

【Kindle本は端末がなくても無料アプリですぐに読めます】

[アプリのダウンロードページ](#)